

不登校を考える

講師を含めて昭和63年から教員になり、平成元年から平成14年まで、1年間を除き、毎年学級担任をした。そのあと、平成20年に最後の学級担任をした。結局、15学級の担任をしたことになる。

（講師1年、職員団体支部執行委員1年、教務主任5年、学年主任2年、計9年は担任を外れた。この間、事情により代打担任を2回した。）

担任をしていたとき、多くの学級に長期休業する生徒がいた。自分は若かったため、フットワークが軽いこともあり、管理職は担任をさせたのだろう。

不登校の理由は様々だった。

家庭、性格、非行、健康、友人、価値、勉強、・・・。

不登校解消へ向け、学校でできることそうでないことがあった。

担任になると、経緯など情報収集を行う。学年で対応と方針を考える。

特に大切にしなければならないことは、昨年までの状況である。学校や担任と本人（家庭）とのやりとりや約束、友人関係の情報などです。これをしっかりしておかないと今からの1年間が失敗し、状況は悪くなります。担任ひとりで対応しないで、学年集団で複数対応することです。

次にすることは、学級を発表し始業式までの短い期間の対応です。可能な限り家庭訪問し、家族や本人へのあいさつです。生徒本人は会ってくれないこともあります。ここからがスタートです。

そして、学級開きの日には、学級の生徒たちへその生徒のことを（可能な範囲で）紹介し、学級の一員であることを意識させることが大切です。事例にもよるが、その不登校の生徒に登校させることを学級集団の目標の一つにすることを学級の生徒へ訴えることもあった。

さて、担任として何をしたか。

それは、学校との関係を維持することです。

定期的な家庭訪問、生徒にも訪問を依頼する。そのとき、授業のノート（了解を得た友人のノート）のコピーを持って行き、何を学んでいるかを伝えます。中にはプリントやテストの解答に評価を与えることもあった。行事などあるときは、役割や進行状況、最後の最後まで出席を促した。（状況にもよるが）これらの取組で、1年間で学級への完全復帰は1～2例あったかな（?）、という状況である。

しかし、次学年から復帰した生徒、高校進学で復帰した生徒、しっかりはたらいっている生徒と様々である。中には、近くの高校へ進学し、本人の努力と高校の支援で国立大学へ進学した生徒もいた。

現在、公立学校は費用対効果の判断として学校の業績評価や調査が入り、数字が公表される。しかし、多感な人間の3年間という短期間で、ある評価基準（もとじゅん）を解決できるかどうかは未知な状況である。対納税者に対する教育に携わる者の言い訳になろうが、学校だけで解決できない事例があるし、時間がかかることもある。学校や教員は、行政や社会から指導や批判を受けるだろうが、できることはやって、最後はそのひとりの人間（生徒）のことを思いやることに尽きるだろう。

ゴールは、学齢期を終え、ひとりの人間として生きていけるようになることです。欲をいうと、その生徒が親になり、「学校や先生は自分のためにいろいろしてくれたな」と思い、立派な親となり子育てをし、学校の応援団になってくれたらいいな、と思います。

学校の先生ががんばってください。そして、ご家族の皆様も学校と協力してがんばってください。